

『世の中はいつも月夜と米の飯 それにつけても金の欲しさよ』

そう歌ったのは誰だったか。

聞くだけで侘しく、切なくなるような魂の慟哭だが、今の私はそれに加えて猛烈な怒りまで覚えてしまう。舐めんなど。おめー米の飯食えてんじやんと。ここしばらく木の根しか齧ってない私にとつて、これほど腹立たしい歌もそうそうあるまい。

そして同時に——深い共感も覚えるのだ。

ああ、それにつけても金が欲しい、と。

春も夏も秋もいいのだ。山に行けば食い物なんざいくらでもあるし、山の幸を物々交換することで着物や鍋を手に入れることもできる。余裕があるなら金子に替えて、僅かとはいえ貯蓄に回すことだってできていたのだ。

これまでは。

これまでなら。

事の起こりは一昨年からとなる。

煩わしさを避けるために里を離れ、竹林に居を構えていた私の主な収入源は、竹林で迷った人々を里まで無事に送り届けることだった。こちらとしてはボランティアのつもりだったが、魑魅魍魎が跋扈する幻想郷において『迷う』という行為はそのまま生命に直結する難事であるらしく、助けた人々から深い陳謝と厚い謝礼を贈られたものだ。

死にたくても死ねない私には遠すぎて忘れてしまいそうな感覚だが、生命というものはお金に替えられない価値を持つものらしい。当時の私は齧ることもできない金子より、感謝の言葉を喜ぶ余裕もあったりして、その後もちよくちよく迷い人を助けた。迷っている人がいないか毎日のように見回り、見回り、見回り続けた。頑張った。当時の私ちよー頑張った。

そして頑張り過ぎた結果——私は職を失うこととなった。

そもそも何故、人は竹林で迷うのか。

簡単だ。道がないからである。

魍魅魍魎を恐れて誰も足を踏み入れない竹林に、魍魅魍魎を恐れない魍魅魍魎の親玉みたいな私が毎日毎日飽きもせず巡回を続けた結果、そこに踏み固められた道ができてしまったのである。ご丁寧にも行く手を阻む竹林を鉦で切り拓き、邪魔な大岩をぐーで割り、雑草の生い茂る藪を炎で薙ぎ払っちゃったりもした。

よしよし、これで楽に巡回できるぞとほくそ笑んでいたのに、「あれー？ そいや最近迷い人がいないなー？ どうしたのかなー？」という疑問を抱いたのが、最近建てられた炭焼き小屋へ向かうおっちゃんに、『よっ、今日も精が出るねえ』なんて挨拶を投げてからなのだから、我が身のボンクラっぷりに眩暈がする。

人を襲う妖怪も、この道は私の縄張りだと認識したのか早々に退散していたし、悪名高き『迷いの竹林』も今では里の一部みたくなもんになっていた。

まあ、それはそれでいいことなただけ。

食い散らかされた人間の死骸なんて、あんまり見たいもんでもないしね？

とはいえもはや安全と成り果てた『元』迷いの竹林では案内人なんて商売が成り立つはずもなく、『通行料払えやコノヤロー』という心の声を押し殺して、タケノコ掘りに赴く親子連れへニコニコ手を振ることしかできなかつた。

そんなわけで職を失った私は原始狩猟時代に逆戻りとなり、物々交換で細々と食いつないでいたのだが……今年の冬、ついに命脈を断たれることとなつたのだ。

今年の冬はひどかつた。

シヤレにならないくらいのだ力雪だつた。

死ぬかと思つた。つか何度も何度もリアルに死んだ。

囲炉裏にあたつて熱燗を飲んでいただけなのに気が付けば死んでいた。死因は一酸化炭素中毒。急激な積雪で玄関や窓が埋もれていたらしい。そしてそのままシームレスに凍死へとなだれ込み、次は雪の重みで屋根が潰れて圧死した。なんだこのピタゴラススイッチ。

ようやく雪の中から抜け出した私は着の身着のままの一文無しで、寝床もなければ食い物もなかつた。里へ行くこうにも腹が減り過ぎて炎すら出せない。

ずびいいいいいい、と濁音に塗れた音が響いていた。

かと思えば、今度は「ふあつくしよい！」と威勢のいいくしゃみが二度、三度。

そしてまた、ずびいいいいいい、と豪快に鼻をすすり「使ってください」と差し出された布きれを受け取って、ずびいいいいいい、と鼻をかんだ。

「花粉症ですね」

「花粉症……？」

聞き慣れない言葉にオウム返して答えると、上白沢慧音は一つ頷いて、

「この時期になると症状が訴える人が多いんです。私もその名前は先日人づてに聞いて知ったものですが」

幻想郷において、そういった新しい言葉の出所というのは大体いくつかに絞られる。

そのいくつかを思い浮かべて、こういう場合はあいつか、と竹林の奥に思考を飛ばして、浮かんだ顔をすぐにかき消した。

該当する人物に対してそこまで思う所はないものの、どうしてもセットでどこぞのお姫様が出てくるのだから仕方ない。

「詳しい原因は解りませんが、なんでもスギやヒノキの花粉がダメなんだとか」

「……私の家の周りには竹しかないんだけど」

「すぐ近くにあるかどうかは関係ないそうで。スギやヒノキなんて、それこそどこにでもあり

ますから」

花粉症という言葉と一緒に聞いたという慧音の話によると、外の世界の山はそれこそ日本中上から下までそんな感じらしい。

結界で隔てられた幻想郷といえど、結局のところは外の世界と同じ空間にあり、日本を覆う花粉からは逃れられないのだそうだ。

「よく解らないけど、それは病気なのか？」

「病気……とは少し違うと思います。病気ならそもそも貴方はかからないでしょう」
「それもそうだ」

ずびいずびい、と鼻をかみながら、今度は藤原妹紅が頷いた。

藤原妹紅。蓬菜人。死ぬことのない人間。

怪我はたちどころに治り、病気にもかからず、塵と消えても髪の毛一本から再生する不死人。そんな体になってからこれまで、良いか悪いかで言えばロクな事がなかった千三百年ではあるけれど、一つだけ自信をもって良かったと言えるのは、病気にならないことだと妹紅は思う。ただの人間だった頃には一度くらい風邪をひいたことがあったはずだが、それも昔の話で最早記憶も臆気にしかない。それでも長い年月の中で病に伏せる人やその周りの人を見てきて、それがどういふものであるのかは理解しているつもりだ。

健康でいられるならば、それに越したことはない。

だというのに、だ。

「目がかゆい……鼻水が止まらない……口の中もかゆい……」

朝起きてから夜寝るまで、あまりのかゆさにずっと目をぐしぐしと擦っていたものだから、目頭の所の皮膚がすり切れてヒリヒリする。

手足が飛んだりした時はすぐ再生するくせに、どうしてこういう地味な所は治るまでに時間がかかるのか。蓬萊の薬というのも、案外いい加減なものなのかもしれない。

「確かに症状は里の人たちのそれと同じですし、それらを抑える薬も先日永遠亭の兎が持ってきてくれた物があります」

「抑える？ 治すではなく？」

「花粉症は色々特殊なものらしく、治すとなると難しいことも多いのだとか」

詳しい部分までは慧音も聞いていないらしく、申し訳なさそうに目を伏せた。

「いや、別に慧音が気にする必要はないよ。あいつがそう言うならそうなんだろうし」

あの姫様の身内というか側仕えというか、それだけでいけ好かない相手ではあるものの、医者としての技量は妹紅も認めるところである。

とはいえ、やはり永遠亭の住人であることに変わりはなく、どれだけ優秀な医者であったとしても、体調不良を訴えて彼女を訪ねるといふ選択肢は妹紅の中に存在しなかった。

里の病人を永遠亭まで運んだ時にこつそり診てもらったことも出来たかもしれないが、なんに

竹林を風が吹き抜けていく。

雨のような音と共に清廉な香りを運ぶであろう風に、ふと血肉の湿ったにおいが混じった。

竹林の中に死体が転がっている。

……それも新鮮な。

「……………お」

そして、つい先ほどまで死体があった。

「っ、く……………」

生きるべきか死ぬべきか。

これは生者必滅の理がある以上普通黙っていても死ぬのだが、そうなる前にあえて駆け足をしようという実に贅沢な試みと言えた。無論元を辿れば贅沢なんて騒ぎではなく、陰謀と復讐が連鎖した結果大体皆死ぬのだが。

それほともかくいつも通り藤原妹紅は死ねなかった。

「……………ああ」

溜息にも似た呻き。

のそりと上体を起こし、両掌を見つめ、身体の力を抜く。

眼を動かして周囲を見れば、自分の頭蓋を抉った鉦が転がっているのが見え、そちらへ手を

伸ばす。眼も身体も思った通りに動き、掴んだ鉈の欠けた刃を確認する彼女は当たり前ながらいつも通りの健康体である。

妹紅が発作的な自殺、或いは無意識的な自殺に興じるのに確たる理由はない。ただふと思いついた様に自殺し、復活し、やっぱ無理かそりやそうだ、と自分の有様を再認識する。

この復活後の納得の為に死んでいるんだろうかとも考えたりするのだが、そういう発想に至るのはまさしく死んだ後で、自殺する際はこれといった思考はない。やらかした後にあーまたやっちゃったと頭を搔くのが常だ。

これでも昔は一々絶望したりしていたが今となつては無感動なもので、戯れに事情を話した永遠亭の凶状持ち達からは普通に正気を疑われた。

まあしかたない。

妹紅自身もどうなんだこれと知っているし。

唯一幸いなのは、人目のある所でこうはならないという一点だ。おかげで面倒が省ける。

「あー……？」

ただ、この一点とか面倒が省けるとかはもう過去の定義と成り果てていた。

後背より物音。

視線をそちらの方へ巡らしてみれば――

「……………」

「……………」
妹紅の視線の先に誰かがいる。

左右で長さの違う緑髪、詰襟付きの装いは制服を感じさせ、背には大き目の背囊を背負っているのが分かる。が、そんな事より驚きを隠せないその表情からどうも色々見られたようだ。

「えーと……………」

彼女の視線が自分に釘付けになっているのを重々承知で、しかし見た目人間っぽいので無下に追い払う気にもなれない。妹紅は鉈を腰の鞘にしまいがてらゆっくり立ち上がると、腕を組んで暫し。

「どの辺から見てた？」

とりあえずの確認。

「…………道に迷っていた所あなたを見つけ、誰何の声をかけようとしたら…………いきなり自決された所から」

若干の間、澱みのない返事。

成程それは一部始終だ。

しかし全部見て逃げ出さない辺り意外と言えば意外だが。

「それはなんというか…………見苦しい所を。…………あー私は藤原妹紅、人間だ。あんたは？」

「…………私は四季映姫。人間ではないですが…………あなたは本当に人間？」